

不思議はなく、必ずしも「所指不同」と見なければならぬ理由はない。それで自分は、唐代以降用ゐられた渾脱といふ語は常に同一類のものを呼んだに外ならぬと考へる。

辭源續篇の編者は前に引いたやうに「渾脱卽囫圇」といひ、完全して殘缺せざるところからいうたのだと考へ、秋苑日涉には「渾脱舞者亦蕃語也」といひながら、然も「中國渾脱蓋活脱之轉」と説き、靈通活脱の義と見てゐるが、いふまでもなく承認し難い。草木子や心史などに、蒙古人がこの語を用ゐたことを示し、態々これに説明を加へて居ることからも、これが夷語の一つであることは察知し得られる。さて渾脱が漢語でなく、少くとも元代には蒙古人が前記の如くにして作つた皮革の囊を呼ぶ名で、その用途が當時主として乳酪酒漚の類を盛るにあつたとすれば、これに關聯して直ちに思ひ浮べられるのは、曾て宮崎・白鳥・鳥居諸博士によつて論述せられた我が保止支、高麗語の服席、秦語の缶、及び匈奴語の服匿等といふ語である(史學雜誌、第十七編、第十八編に載せられた) (三博士の保止支といふ語に關する論文参照)。これらの語が同一語原に屬し、今の朝鮮語の patangi、滿洲語の budun、蒙古語の budung に當ることは爾來定説と認められて居ると思ふ。ところでこゝに述べた渾脱 hun-to(Yun-tat)= 我が樂書では特に ko-tat と讀ませてゐる = がまたこれ等の服匿 funi (puk-tok) 保止支 potogi 等と著しい音聲の類似を有することは注意しなければならぬ。或は服 puk, buk 保 po 等の頭音 b, p と渾 hun, khun, ghun の頭音とは異ると見る人があるかも知れないが、蒙古語に於ける $p > h >$ の轉移は極めて普通のこととて、匈奴語の服匿を唐代以後の蒙古語、もしくはその類族語の渾脱にあてゝも、此の點に於て何等疑義を挿むに及ばない。budun, budung, 保止支などは土製の饅を呼ぶに用ゐられる名であると共に、また革製の饅・甕をも稱する名であること、もしくはあるべきことはまた宮崎博士や鳥